

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

こんにちは。前回に引き続き今回も「形のないものにして形の本質」をピュタゴラス派をもとに考えて見たいと思います。

以下はピュタゴラス派のピロラオス（前 470 年頃の生まれ）の書物からの断片です。とても神秘的ですが、まずは味読してみましょう。

断片 1. 「宇宙のうちにある自然万有（ピュシス）は、無限者（限定を受けていないもの）と限定者（限定を加えるもの）から、調和的に組み立てられたのだ、全体としての宇宙も、その中にある一切のものも。」

断片 4. 「知られるかぎりのものはすべて、数をもつ。というのも数なくしては何ひとつ思惟されることも、認識されることもできないからだ。」

断片 5. 「じっさい、数は二つの固有の種類、すなわち奇数と偶数を持ち、また第三のものとして、この両者から混合されてつくられた、奇偶数（一）をもつ。」

注：奇数＝限定者、偶数＝無限者、一＝第三のもの（奇偶数）ということです。

断片 7. 「調和的に構成された原初のもの——なるもの——は（宇宙という）天球の中心にあって炉と呼ばれる。」

断片 6. 「もし宇宙を構成する諸事物、つまり限定者どもと無限者どもの存在性がなければ、およそ存在し、私たちによって知られるものの何ひとつとして、存在することにはならなかったであろう。…そしてこれら（二つの）原理は同じものでもなければ同族のものでもなかったら、それらの原理によっては、宇宙の秩序づけはなされえなかっただろう。もし調和（ハルモニア）がつづいて生じたらなかったなら。さて同じであるもの、同族のものは、調和を何ひとつ必要としなかったが、他方、同じでないもの、同族でないもの、同じ序列にないもの、これらのものは、宇宙秩序のうちにしっかり組み込まれるためには、調和（ハルモニア）によって固く結合される必要があったのだ。」

専門的にはもちろん様々な解釈がすでにあるわけですが、ここではそうしたもののから自由に一緒に考えて見ましょう。まずは断片 1 の「無限者」と「限定者」から。

目に見えるもの、音に聞こえるものそれ自体は不定形的な連続体です。これは「無限者」です。これに形を与えるものが「限定者」で、完全な円やドがそれにあたります。完全な円は見ることも思い描くこともできません。また完全なドも音に出して聴くことはできません。しかし完全な円やドがなければ目に見える円も、音に聞こえるドも成り立ちません。その意味で、完全な円やドは、目に見えるもの、音に聞こえるもの（感覚的なもの）の背後にあり、それらの形を成り立たせる理性的なものであると考えられますが、この理性的なものがピュタゴラス派によれば「数」です。断片 4 にあるように、この「数」という理性的なものによって、我々は思考したり認識したりすることができるとされているのです。

断片 5,7 では存在の原理としての「無限者」と「限定者」と、両者から「調和的に組み立てら

れたもの」が、認識の原理としての「数」に結びつけられて、奇数＝限定者、偶数＝無限者、奇偶数（一）とされます。ここで宇宙の本質と我々の魂の本性的な同一が主張されていることになります。「一」は天球の中心たる「炉」と呼ばれています。

断片 6 が難しいですね。「無限者」と「限定者」という二つの原理が「同じ・同族」の場合と、「同じでない・同族でない」場合とに分けて述べられています。「同じ・同族」の場合は「調和を必要としない」けれど、「同じでない・同族でない」場合には「調和を必要とする」と述べられています。ここは解釈を必要とします。二つの原理が「同じ・同族」の場合とは、「無限者」と「限定者」が「一」においてすでに調和的に組み合わさっており、この三原理が未分離の状態にあると考えられます。ちょうどそれはすべてを溶かす「炉」のようです。これはどのように考えたらよいのでしょうか。

完全な円やドは思い描くことさえできません。思い描いた時点で一定の不完全な円やドになってしまうからです。その意味でそれらは対象化もできない、形のないものです。完全な円やドそのものは形のないものでありながら、形を与えるものであることになります。形のないものとしては「無限者」ですが、形を与えるものとしては「限定者」で、これら両者が完全に同一となっています。つまり「無限者＝限定者＝一」です。

今のは存在の原理に関することですが、認識の原理としてはどうでしょう。完全な円やドは見ることも聴くこともできない、純粹思惟の対象です。我々はそれをどこかで直観していることになります。そうでなければ我々はそれを円やドとして認識することはできないでしょう。これは認識における限定者ということになるでしょう。他方完全な円やドは対象化できず、形にすることもできません。これは認識における無限者ということになります。そうして両者は我々の心の本性において一つということ、で、「限定者＝無限者＝一」が認識（直観）において成立していることになります。

存在の原理として考えても、認識の原理として考えても、この場合は「限定者」と「無限者」と「一」とが未分離の「一」をなしており、ここに「調和」が必要とされることはないでしょう。

ところが二つの原理（「無限者」と「限定者」）が「同じでない・同族でない」場合には、「調和」がこれらを固く結びつけることによって、「宇宙秩序」が保たれるというのです。これはもともと未分離の「一」であった「限定者」と「無限者」と「一」が、「限定者」と「無限者」が対立することによって、「一」が「調和」の原理になったと考えることができます。つまり「限定者」と「無限者」と「一」が分離した状態です。これはどのように考えたらよいのでしょうか。

まず不定形な感覚が「無限者」として立ち現れ、これに形を与えるものが「限定者」として立ち現れます。両者は矛盾していますから、宇宙は全体としても、その一つ一つとしても生成消滅を繰り返すものになります。そこでそれらをしっかりと秩序の内に固く結びつけるものが「調和」の原理です。具体的に言うと、完全な円やドが目に見える円や音に聞こえるドになることを通じて、不定形の感覚に形が与えられ、感覚的な調和や秩序（宇宙）が成立しますが、それは不完全なものです。それらは絶えず生成消滅を繰り返すものですが、それに対抗してそれに「調和」をもたらそうとする働きがある、ということです。

宇宙の本質にして我々の心の本性は形なきものであると同時に形の本質ですが、感覚的な世界は不完全な形の世界であり、生成消滅する形の世界です。形なきものと形あるものとの矛盾した世界です。こうした矛盾した世界において儚く不完全な形に執着することが迷いであり、次々に新たな形を求めては生成消滅と苦楽を繰り返す無意味（輪廻転生）が人間の最大の苦ではないでしょうか。

我々は音楽や数学をつうじて形の本質（宇宙の本質）に触れると同時に我々の心の本性に触れています。それは宇宙秩序が示す（不完全な）「調和」を通じて、原初の「一」に触れているということです。数学におけるひらめきは数や図形の本質が開かれることであると同時に、我々の心

の本性に目覚めることであり、音楽における感動は音の本質の響きを聴くことであると同時に我々の心の響きを聴くことでもあります。総じて宇宙の本質の響きを聴くことであると同時に我々の心の響きを聴くことが感動です。我々はこの感動、すなわち「調和」の聴取、吸収を通じて、いわば魂を調弦し、それによって原初の「一」に帰って行く、それがピュタゴラス派のいう「魂の浄め」なのかもしれません。形あるものを感覚せざるを得ない人間には形あるものへの執着や迷い、苦は避けられません。しかしこうした迷いがあるからこそ、それが破れ、宇宙の本質と我々の心の本性が開けるということが起こり得ると考えられるのです。

